

金大中とキッシンジャー

先日、ヘンリー・キッシンジャー博士が100歳で亡くなった。また、今年は金大中元韓国大統領の生誕100年である。この両名は私が尊敬した政治家、外交官であった。

金大中元大統領は波乱万丈の人生を送った政治家だ。民主化運動家として頭角を現し、何度も収監され軍事政権に命を狙われながらも生き延び、民主化された韓国において1998年から2003年まで大統領となった。民主化運動を行っていた1973年にKCI Aの策謀で東京から拉致され、小舟でソウルに連行された「金大中事件」も発生した。私は外務省退官後も何度もお目にかかったが、その都度「不撓不屈」ぶりに強い

印象を受けた。金大中元大統領は民主化の闘士であっただけではない。彼は朝鮮半島の平和を希求した理想主義者でもあった。1998年に「未来志向」の日韓共同宣言を小渕恵三首相と発出したが、

これは東アジアの平和と安定のためには過去に縛られた日韓関係を大きく飛躍させるべし、というそれまでの（また、その後の）大統領の姿勢とは大きく異なる決断だった。本来反日的な意識を持つてもおかしくない左派の大統領であったが故に、このような事が可能であったのだろう。金大中大統領は日本文化の開放を行い、日本では韓国テレビドラマなどで韓国ブームが起きた。2002年のサッカーワールドカップ日韓共催を契



田中 均

たなか・ひとし 69年京大法学。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所理事長を経て特別顧問、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

機として羽田―金浦のシャトル便も就航し、日韓関係の進展には目覚ましいものがあつた。

金大中大統領は北朝鮮に対して経済支援などを先行して行い北朝鮮の変化を待とうという「太陽政策」を実行し、00年6月には北朝鮮を訪問し非核化宣言を行った。02年9月に小泉首相が訪朝し、日朝平壤宣言を締結したが、米国が北朝鮮に強硬政策をとるなかで日本が韓国に同調する政策をとったことを韓国は喜んだ。小泉訪朝の結果報告のために私は金大中大統領にもお目にかかったが、大統領

の喜び顔が忘れられない。一方、キッシンジャー博士はイデオロギーを超えた冷徹なリアリストだ。1972年のニクソン大統領の訪中に先立ちキッシンジャー大統領補佐官が中国を訪問し準備を行ったが、完全な極秘外交だった。私は外務省退官後、日米欧三極委員会などでキッシンジャー博士の知己を得た。三極委員会の日本側主催団体であった日本国際交流センターの山本正理理事長は私の友人であつたが、キッシンジャーが日本に訪れる際のリエゾンの役割を果たしていたこともあ

り、訪日のたびに私達と中国についての意見交換の機会を持つ事となった。キッシンジャーは米国とは異なる利益を持つ日本が中国にどう政策展開をしていくのか強い興味を持っていた。また、ある時、キッシンジャーが私の北朝鮮との交渉を承知していて、「田中さん、私達には幕場まで持ち込まなければならぬ秘密がある」と述べたのを懐かしく思う。

理想主義とリアリズム。その両方を外交官は持たなければならぬ。私は思ひ続けている。朝鮮半島の平和を作りたい、東アジアの共同体をつくりたい。金大中大統領が持った同じ理想を持ち、外交に携わってきた気がする。しかし同時に、現実の世界で大きな外交を行っていくためには、国際関係全般や国内政治状況、世論の動きなどについて冷徹な目で判断をしていく必要がある事は言うに及ばない。

ウェーブ

時評
wave